

エマは、魚を飼うなんてつまらないしゆみだと思いましたが。お兄さんの ジョーの 水そうに入ってる魚だって、同じことです。

「魚って、ぬるぬるしててくさいし、ちっともおもしろくないもの。ただ 水そうの中を泳ぎ回ってるだけじゃないの。」と、エマが言いました。

「イエス様だって、魚が 好きだったんだよ。人々がおなかを すかせていた時、イエス様は みんなに パンと魚を あげただろ。」と、ジョー。

「魚は、食べるのはいいけど、ペットにするなら、うさぎか 何か、だっこできるものがいいわ。」とエマは言いました。

けれども エマは、ジョーの 魚から 大切な 教訓を学ぶことになります。

ジョーは、これから 3週間の サマーキャンプに出かける ところでした。「ぼくが いない間、魚に えさを やってくれないかい？」 ジョーが エマに頼みました。

「いやあ〜！」

「お願いだから、エマ。頼むよ。」と ジョー。

「わかったわよ。」 そうは 言ったものの、エマは 内心、ママに その 仕事を 代わってもらえるかも、と 考えていました。それか、おとなりの セドリックなら、彼自身も 自分の 魚を 飼っているので、1日に 1回 くらいなら、うちの 魚にも えさを あげるのを 手伝って もらえるかも。

ジョーは 大喜びでした。お兄ちゃんが 喜んでくれたので、エマまで うれしく なりました。絶対に、ママか セドリックに この仕事を 手伝って もらわないと。エマは そう 決心しました。

エマ、スージーと で あ 出会う



ふつか すぎ、エマは ふと、魚に えさを やって
いないことを 思い出しました。あわてて ジョーの
部屋に 行って えさの 容器を つかむと、魚は
えさを 期待して 水面近くに 上がってきました。
そして、輪を かくように 泳いでいます。(まあ！
ごめんなさいね。あなたたちのこと、すっかり
わすれちゃって！)

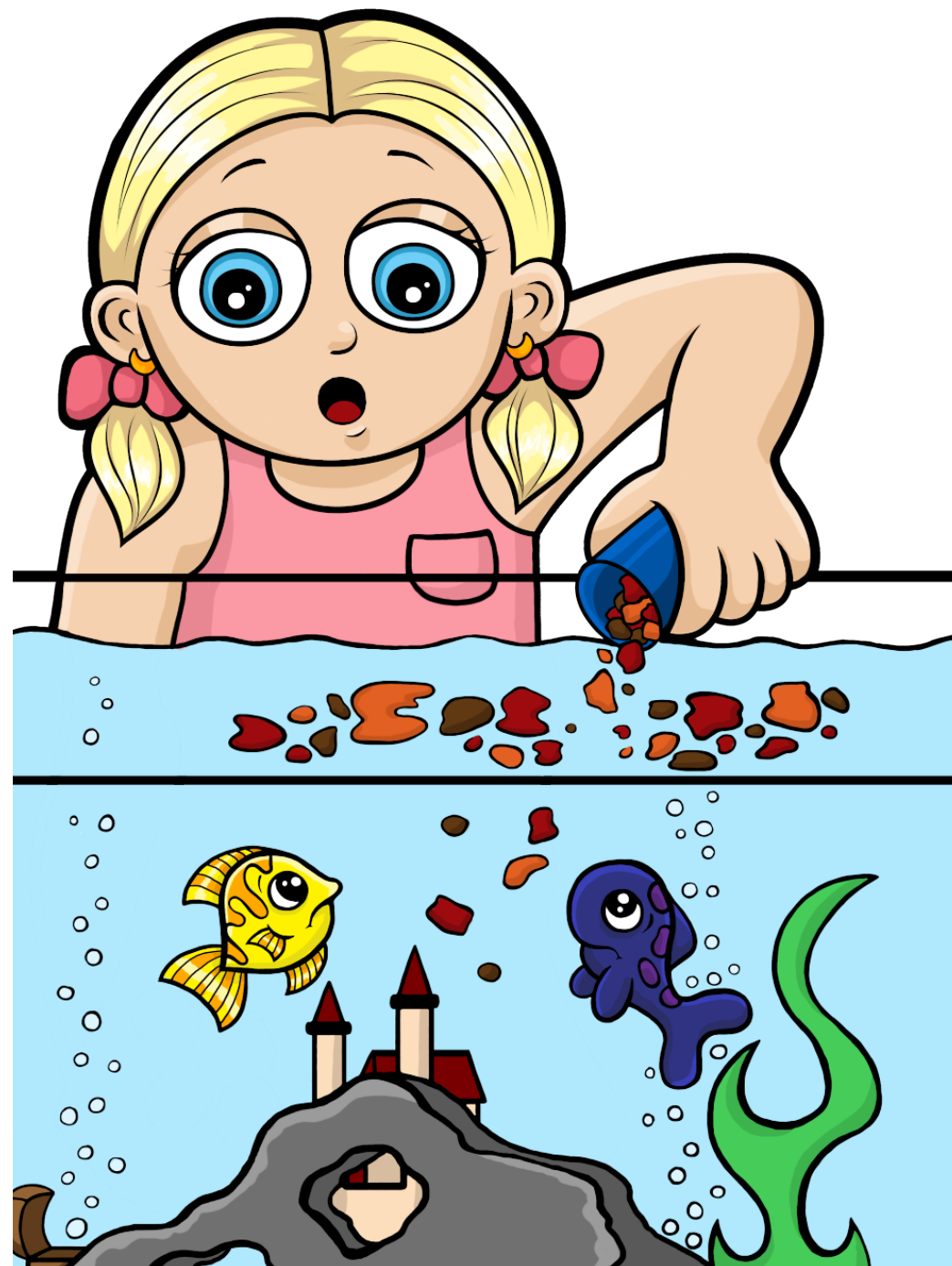
ジョーは、えさの やり方を見せかけていました。
少しずつ つまんで、水面に ふり入れるのです。
けれども、エマは 魚くさい えさに 指を 入れたく
なかったの、容器から 直接 ふり入れることに
しました。

「いけない！」 容器の 半分くらいの えさが、
水そうの 中に どっと 落ち、水面 いっぱいに
広がってしまいました！

(どうしよう！) と エマは 思いました。
(・・・でも、2日も えさを やっていなかったから、
よ ぶん ひつよう 余分な えさが 必要だったのよ。)

(まあ、食べてるところ、かわいいわね。)
魚が えさを 食べるようすを見ながら、エマは
おも 思いました。

つぎ エマが 魚を 見に行った時には、また
ふつか 2日が たっていました。水そうからは、
くさい においが ただよっています。魚は
新鮮な 水を 求めて あっぷあっぷしながら、
水面近くに 泳いでいました。また、水そうの
内側には、緑色の ぬるぬるした うすい まくが
は 張っていました。



最初は エマが 思ったのは、ジョーの ことでした。
今の 水そうの 状態を 見たら、彼は どんなにか、
失望することでしょう。(大変！ くさった 食べ物で
いっぱいの きたない 水の 中に 住むなんて、いやに
ちがいないわ。) エマは はずかしくなりました。

(ジョーの 魚を ちゃんと 世話してなくて、本当に
ごめんなさいね。もし わたしが うさぎを 飼っていて、
わたしが いない間に その世話を ジョーに 頼むなら、
できるだけ よく 世話してほしいと 思うわよね。

イエス様、どうか、ジョーの 魚をよく 世話し、水そうを
きれいに するために 何が できるか、教えてください。)

エマは セドリックのことを 思い出して、すぐに、
どうしたら いいか 聞きに 行きました。

状況を 聞いて、セドリックは エマに 言いました。
「食べ残しの えさを 取り出さないとね。フィルターを
掃除して、水そうの 内側を 布で ふくんだよ。それから、
よごれた 水を 半分 出して、代わりに きれいな 水を
入れるんだ。」

(手を、その 水の 中に入れて 入れなくちゃ いけないの?)
考えただけでも、エマは ぞっと しました。

が、その時、ヨセフの 物語を 思い出しました。
彼は、エジプト人のために 働きたくは なかったけれど、
どこに いても、神は 彼に いっしょうけんめい 働いて
ほしいのだと わかっていました。ですから、
自分の 置かれた 状況が どうであれ、
彼は いっしょうけんめい 働きました。
たとえ ろうやに 入れられた 時でさえ、
熱心に 働いたのです。エマも、たとえ
なんで あれ、いっしょうけんめい
やろうと 決心しました！



最初は、きたない水そうから目をそらさない
ことだけでもせいっぱいでした。けれども、
がんばってやってみると、結局はそれほど
いやなことでもないとわかりました。セドリックに
教わったように、サイフォンを使って残ったえさを
吸い出した後、石や水草を整えました。

作業が終わるころには、ちゃんとできたことで、
エマはうれしくなりました。水そうの内側も
水の中も、きれいになりました。魚達も、水そうの
中を再びあちこちと元気そうに泳ぎ回っています。
遊びに来た友だちも水そうを見て、とてもきれい
だと言ってくれました。セドリックがエマに、
ちゃんとできたので感心したよと言うと、エマは
思わずほえみしました。

それからというもの、エマはえさをあげる時、
容器から自分の指でひとつまみだけをあげる
ように、気をつけました。また数日ごとに、
自分の手を入れて、水そうの内側を布で
ふくことさえしました。そうするのはいやだった
けど、それが正しいことだとわかっていたから
です。もしエマがうさぎを飼っていたら、
ジョーはきっと、よく世話してくれるでしょう。

ジョーが帰ってくると、家にいたら自分が
するであろうほどエマが魚をよく世話して
くれていたと、一目でわかりました。



「エマ、プレゼントがあるんだ。^{よる}夜に なってから あげようと
おも^{おも}ったんだけど、^ま待てないや。」 エマは、ジョーがくれた
おお^{おお}きな ^{はこ}箱を ^あ開けました。箱の ^{はこ}中^{なか}には、毛が ^けふさふさした、
はいいろ ^こ子ネコが ^{はい}入っていました。

「まあ、なんて かわいいのかしら！ うさぎよりも かわいいわ！」
と エマが ^い言いました。

「キャンプに ネコが ^こいたんだ。その ネコに ^こ子ネコが ^いいてね。
エマのために ^{いっ}1匹き ^{かえ}もらって ^{かえ}帰るのは どうかなって、ママに
でんわ ^き電話で ^き聞いたんだ。

ママは、エマが ^{さかな}ぼくの ^い魚の ^{さかな}めんどうを よく ^みみているので、
かんしん ^い感心したって ^い言ってたよ。魚を ^{さかな}好きでも ^すないのにね。とても
いっしょけんめいだったの、子ネコを ^こあげたら、すごく
かわいがってくれるだろうって。」

それが、エマと スージーの ^で会^あい^いです。（スージーは、
エマが ^こ子ネコにつけた ^な名前^{なまえ}です。） ^{いま}今では、エマは ^{まえ}前よりも
^{さかな}ずっと ^す魚が ^す好きになりましたが、子ネコの スージーは
^{とうぜん}当然のことながら、大好きな ^{だい}魚を ^{さかな}毎日 ^{まいにち}何時間^{なんじかん}も ^なながめて
いますよ。

